会議議事録

|  |  |
| --- | --- |
| 事業名 | 令和3年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」（２）教職員の資質能力向上の推進①効果的な教育成果②教職員研修プログラムの構築 |
| 代表校 | 一般社団法人全国専門学校教育研究会 |

|  |  |
| --- | --- |
| 会議名 | 第2回教員研修プログラム開発委員会 |
| 開催日時 | 令和3年12月21日（火）　13時00分～15時00分 |
| 場所 | 福岡　リファレンス駅東ビル会議室（オンライン併用） |
| 出席者 | 事業責任者：高岡　信吾 委　　　員：上里　政光、岡村　慎一、猪俣　昇、植上　一希、佐藤　昭宏（オンライン参加）菊池　裕生　　　　　　　　　　　計7名請負業者：飯塚　正成　　　　　　　　　　　　　　　　　　　計1名　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合計8名 |
| 議題等 | 1. 学習評価WG進捗状況（植上）

・11月以降、アクションリサーチ3回、研究者ミーティング3回、昨日第4回学習評価WGを実施した。　(1)アクションリサーチについて①人材・能力像の設定における非認知能力の明確化に関するアクションリサーチ・問題意識として、専門学校の人材・能力像を設定しているが、非認知能力の観点は明確でない場合が多いと考えている。強みを認識するためにも、非認知能力の観点を用いて、自分の学科が養成している人材・能力像の構造化をする必要がある。・課題解決のために、研修で使用できるような好事例並びにワーク、ワーク終了後も、現場で汎用的に用いることができるツールを作成するという目的のもと、研究者と現場で共に行う形でOIC、YICにおいて調査を行った。・この調査でOIC、YICの非認知能力の構造図が作成された。この構造図を作成することで、自分の学科・コースがどのような能力をどのような構造で養成しているのか共有でき、外部・学生に対しても打ち出せるような図になると考える。この図を作成するために、左側に非認知能力、横軸に社会人基礎的な能力・職業専門的な能力の表を整理する。この作業をすることで養成している非認知能力の整理に繋がるということで、この2つのツールを作成した。このツールについては、昨日のWGでのご意見を反映しより使いやすいツールにしていきたいと考えている。②教育課程編成における非認知能力の明確化に関するアクションリサーチ・人材像・能力像の設定後、カリキュラム編成をしていくが、その場合も非認知能力の観点が明確でない場合は多い。正課内・正課外を含めた教育・学習契機において、どのような非認知能力が身についているのか、また教育側はどのような非認知能力を獲得させようとしているのかについての意識化・明確化が必要であると考えており、その課題解決のために、好事例を作成し、かつ汎用的に用いることができるツールを作成する。・こちらに関してはKBCにおいて、養成を目指す非認知能力を１つとりあげ、主に1年生の学習過程がどのように関連しているのかについて明確化する調査を、研究者と現場で実施した。・成果物として、非認知能力の学習過程に関する図、IRCを当てはめた場合の図が作成された。ブライダル科でチームワークという非認知能力を取り上げ、1年次後半に行われるインターンシップに向けて、どのような契機で、どのような働きかけをしているのか、正課外活動と正課教育活動に分類し、区間ごとに抽出した図式になっている。入学時から1年生後半に向けてどのようにチームワーク力が発出していくのか、学んでいくのかが見えるようになっている。この図式の作成で、教員・学生に学習過程の明示化がすることができると考えている。(2) 学習評価WGでの議論について・上記の諸点について報告し、いただいたご意見を元に教育プログラムを作成、さらに調査についての課題もいただいたので、次年度以降の活用計画についても検討していきたい。(3) 研修プログラム・手引きの開発について①手引き案について・次年度完成を目標にしており、資料記載の章構成でテキストを作成する。・今年度は、手引きの作成は1～3章を中心に行う。1～3章を中心とした研修プログラムの実施後に、執筆に着手する予定。②研修プログラムについて・手引きは総体的かつ説明的、研修プログラムは部分的かつ実践的と位置付けており、今年度の研修の位置づけについては、アクションリサーチをもとにした研修プログラムの試行・改善、手引き作成のための試行として位置付けている。・研修は、1月に沖縄と岡山で1時間半×2の3時間構成で実施を予定している。研修の対象は学科・コース単位のグループワークを考えており、1つの学科3～4人程度の参加で、4グループ程度を想定している。・構成は1時間目と2時間目に分けており、1時間目は短めに、非認知能力に着目する理由、また活用していくことを受講生に納得してもらうことを目的とする。・昨日のWGでは、非認知能力を明確化したり評価したりする、学生にとっての意味を丁寧に説明していくことが必要とのご意見をいただいたので、研修に盛り込んでいきたい。また、1時間目も講義だけではなく、簡単なワークを取り入れたいと考えている。・2時間目は長めにとって、「人材像の設定に非認知能力を用いよう」をテーマに、OIC、YICで作成した人材・能力像の構造図の紹介・作成を中心とする。研修を通して、人材・能力像の設定における非認知能力の重要性を納得してもらうこと、ならびに、その方法の一部を経験してもらい、学科で意識・活用してもらうことを目的・目標としている。・ワークは委員がコーディネーターとしてフォローし丁寧に進めていきたい。・ワークをしっかりするためにワークは1つに絞り、2時間目だけにし、IRCの教育課程編成と非認知能力の関係については、2時間目の第5章で事例紹介として組み込む。・人材・能力像を非認知能力の観点から構造化する意味、特に教員側の意味について、教育課程編成委員会を含んだ企業対応、学生対応の観点から丁寧に説明する。・教育プログラムは12月から1月にかけて研究者委員で作成する。研修後のアンケートデータを元にしたプログラム改善を来年度の課題としたい。【意見等】・特になし。（佐藤・菊池・猪俣・高岡・岡村）・研修実施後、参加された方々のご意見を伺いながら、プログラムのブラッシュアップ、内容の検討を進めて欲しい。（上里）・研修の3回目は検討しているか。（飯塚）→時間を考えると現状は厳しい。2回とする。（植上）1. ICT活用研修WG進捗状況（猪俣）

・これまで4回WGを実施し、実証講座ついて何を期待するか、求める人材像はどのようなものか検討してきた。・対象者は経験年数問わず幅広く捉えており、1つめの目的として、学習に対する意欲が低い学生、自律学習が苦手な学生の主体性を促すコミュニケーション理論の理解とコミュニケーションスキルの習得、それを踏まえ、 ICTを活用することで、より一層効果的かつ効率的なコミュニケーションを実施できることを狙いとしている。・具体的には「デジタルハリウッド大学大学院」と「山野美容芸術短期大学」の事例として取り上げ、実践事例をヒアリングした。・肝となる学生同士、学生・教員間のコミュニケーションスキルを理論から学ぶことをケーストレーニングで指導の現場で再現性を高める。・実証講座は①事前学習②対面研修③事後課題の3部構成になっており、デジタルハリウッド大学の石川先生にICT分野を中心に、リソースフルの中田先生にコミュニケーション分野を中心に講師を担当していただく。・事前学習は「アダプティブ・ラーニング教授法に資するICTツールのTIPSをまとめた2時間程度の動画教材学習」の視聴を予定している。具体的にはお金をかけずに使えるGoogleのclassroomを中心に説明する。・対面研修は現在3か所、1/20に岡山、2/4に京都、2/8に新潟でそれぞれ3時間半を予定している。当初は東京と新潟の予定だったが、コロナ禍を考慮しこのようなスケジュールとなっている。・事後課題は、対面研修で得たこと学んだことを現場ご自身の授業で実践、結果レポート提出していただく。また対面研修時にアンケートを実施し、ご意見を次年度の改善に繋げる。レポートの提出期限は2/28とし、レポートをまとめ今年度終了となる。・対面研修後はWGを開催し、それぞれの研修の振り返りを行う。【意見等】・参加者の定員が15名となっているが、当校では40名ほどになるがどうか。また、開催校で準備するものをあらかじめ連絡が欲しい。（高岡）→15名を超えても問題ない。準備についてはまもなく案内をする。（猪俣）・中田先生のパートとICT活用の絡め方はどうなっているか。（高岡）→現状明確になっていない。改めて確認する。（猪俣）→石川先生がジョイントする説明をするという話だったが、コーチングとアダプティブ・ラーニングをするためのICTを活用したエビデンスをどう連携するかがこの研修の要。今の研修内容では、教育の現場において個別最適化に繋がる部分が見えていないと感じている。（岡村）・事前学習のビデオ撮影は終わっているのか。（上里）→年内には終了し配信可能と聞いている。（猪俣）・中田先生のパートがどのようにICTに関係してくるか、あくまでも“ICTの活用を含めた”ということがテーマなので、対面分野をいかに活用するか、研修前に内容を詰めて欲しい。（上里）・効果検証にいくつか階層があると思うが、オンデマンドと対面のコーチングの学習習得への効果は、学生それぞれ違うパターンが出てくると思うので、それぞれの学生に対して効果的なフォローが出てくると面白いと感じた。（佐藤）→石川先生のパートはどちらかというと上位層向けで、下位層向けに中田先生のコーチングで対応する形になっているが、コーチングをどのようにICTに繋げるのか、そこが見えてくると内容が濃くなると感じる。（高岡）→対面の指導の中で効果を発揮しているものが、ICTでどの程度再現可能なのかにフォーカスすると良いのではないか。（佐藤）→変えたい・変わりたい人にはコーチングは有効だが、専門学校ではそう思っていない学生をどうするかということが課題なので、そこにこの手法がどのくらい有効なのかエビデンスの中から顕在化して有効的なアプローチ方法などが出ると良い。（岡村）→そこが課題だとすると、コミュニケーション理論ではなくモチベーション理論や自己決定理論をコーチングに落とし込んで学生のタイプに合わせたパターンを考えていく方向が深堀の仕方としては良いのでは。学生・生徒のプロセス・パフォーマンスの質の振り返りや可視化はツールが出てきているが、どこにフォーカスしてフィードバックするかがポイントになる。（佐藤）→例えば、成績が良くなく補習が必要なのに「なぜ私が補習をしなくてはいけないのか」と考えるような学生をどう底上げするか、対面でのコミュニケーションが十分に取れない部分をICT活用で賄えるようになるといった効果的な方法の紹介があると良い。（高岡）・始まる前にそういった課題があるということを含めてWGでも検討する必要がある。講師の方にも情報共有をお願いしたい。（上里）1. その他・スケジュール等

・新型コロナの感染状況による研修開催の判断は、研修開催校の規定・ガイドラインに準じ、それぞれ開催1週間前までに判断する。対面開催不可の場合は次年度開催とする。・第3回教員プログラム開発委員会…2月15日（火）16時～　@福岡 |
| 配布資料 | ・2021年度　会議　20211221　・12月20日学習評価WG報告（小田）・irc第2回AR 整理（20211220 学習評価WG資料）・2021年度学習評価　研修プログラム案（修正）　・教育研修プログラム開発委員会資料\_令和3年度\_全専研ICT実証講座について |

以上